

2020年3月(33号)

# JACET 北海道支部 Newsletter

<北海道支部事務局>

〒065-0013 札幌市東区北13条東3丁目1番30号

天使大学教養教育科 目時光紀 研究室内

TEL : 011-741-1051 (代表)

Email : metoki0702 [@を入れる] gmail.com

URL : <http://www.jacet-hokkaido.org/>



## [巻頭言]

### 2019年度を終えて

JACET 北海道支部長 上野之江

令和元年度(2019)は英語民間試験の導入延期、新型コロナウイルス感染拡大に伴う週末の外出自粛要請への対応などでいつもよりあわただしく日々が過ぎております。皆様にはお変わりなくお過ごしでしょうか。

JACET 北海道支部も北海道知事から出された「緊急事態宣言」に呼応し、2月29日に予定していました第2回合同研究会を中止することになりました。発表者の先生方や年明けから準備に奔走してくださった役員の皆様には申し訳なく思っております。新年度の支部大会や研究会で埋め合わせをする予定です。他支部研究会や本部の会議も同じように中止または延期になりました。

このようないつもと違う年度末ではありますが、ここに『JACET 北海道支部ニューズレター第33号』を無事お届けできることを嬉しく思います。会員の皆様には常日頃からお協力いただき深く感謝いたしております。

昨今の大学英語教育は再度転換期に入ったような印象を受けます。小学校で英語が教科化され、大学入試センター試験が終わりを告げました。主体的・協働的に学ぶアクティブ・ラーニングへの転換実践が注目を集め、グローバル化に対応した英語教育として学生の海外留学派遣が推奨されつつあります。このような時期に、大学英語教育の専門集団としてJACET 北海道支部でそれぞれの知識と経験を共有し、よりよい英語教育を学生に提供する責務を遂行していきたいと思っております。そのような教育研究における切磋琢磨の場、交流の場、情報提供の場として支部研究会や支部大会を活用していただければ幸いです。

2019年度は、第33回北海道支部大会と支部総会が北海道武蔵女子短期大学を会場に、7月6日(土)に開催されました。基調講演に小泉利恵先生(順天堂大学)をお迎えし、最近の課題であるスピーキングテストの方法、評価について学びました。シンポジウムでは、

「Integrating Theory and Practice in Testing and Assessment」というテーマで小泉先生、佐藤臨太郎先生（奈良教育大学）、北海道支部から笠原究先生、佐野愛子先生がパネリストとして参加しテストングと評価について英語でさらなる議論を繰り広げたのが印象に残っています。研究発表は動機減退のプロセスとその要因、セラピスト養成大学で英語プログラムについてなど英語教育の分析と実践について2件ありました。

第1回研究会は、11月23日（土）北海道教育大学札幌駅前サテライトで北海学園大学の浦野研先生によるワークショップ、「日本の英語教育研究が行ってきたこと、こなかったこと」でした。日本の英語教育について我々が真剣に考えなくて誰が考えるのですか、という浦野先生の真摯な問いが深く記憶に残っています。研究発表は2件あり、その後、海外研修プログラム交流会として、3大学の海外留学プログラムの紹介と質疑応答がありました。貴重な情報交換の場となりました。

新年度、2020年度は東京オリンピックの年です。支部大会の日程には影響なく、例年通り7月11日（土）北海道医療大学あいの里キャンパスで開催する予定です。基調講演に寺沢拓敬先生（関西学院大学）をお招きし言語政策関連の講演をお願いしています。そのあとのシンポジウムを行います。研究発表は例年通り募集いたします。

2020年度の第59回国際大会は2020年9月8日（火）～10日（木）、同志社大学 新町キャンパスで開催予定です。英語教育における「ウェルビーイング」－ 学習者、教師、社会の可能性を拓く－をテーマに多くの講演と研究発表が予定されています。例年より1週間遅れの開催となりますが、多くの方の参加を期待しています。京都では早めの宿泊場所の確保をお勧めします。

2021年の国際大会は60回記念国際大会となります。2021年8月28日（土）～30日（月）広島市の安田女子大学で開催予定です。

ウィルス感染防止のため自宅待機の方は、JACET 紀要や RBET への執筆もご検討ください。投稿規定は JACET 北海道支部 HP にあります。

今年度の会員の皆様のご活躍を祈念して、巻頭言といたします。

## 〔2019年度支部総会〕

日時：2019年7月6日（土）12：30～12：50

会場：北海道武蔵女子短期大学

<報告>

1. 支部長報告
2. 幹事報告
  - 2-1. 2018年度 事業報告
  - 2-2. 2019年度 事業計画
  - 2-2. 2019年度 人事

※本年度の事業計画、人事は、昨年の支部総会にて承認され、昨年末に本部に提出されています。

3. 各種委員会報告
4. その他

<議題>

1. 2020年度 事業計画案
2. 2020年度 人事案
3. その他



## 〔2019 年度支部大会〕

日時：2019 年 7 月 6 日（土）13：00～17：15

会場：北海道武蔵女子短期大学

### 研究発表 1

「英語学習における動機減退のプロセスとその要因 -PAC 分析と複線径路・等至性アプローチ (TEA) による分析-

三ツ木真実（小樽商科大学）

本研究の目的は、大学生英語学習者の英語学習経験の語りを通じて、英語学習の動機づけ減退におけるダイナミックなプロセスと減退をもたらした要因を捉えることである。この研究では、インタビューを中心としたデータの収集と分析を行った。動機減退の過程で調査協力者にどのような経験があったかを具体的に捉えるために、個人別態度構造分析 (PAC 分析) (内藤, 2002) を実施した。その結果を踏まえて協力者へのインタビューを行い、複線径路・等至性アプローチ (TEA) (安田・サトウ, 2017) による分析を行った。分析の結果、英語学習環境に存在する様々な社会的要因が学習者の動機の減退に影響を与え、さらには教師の行動や英語力に対する自己認識、他者との比較等の具体的な出来事によって協力者に新たな信念や価値観が生じ、それらが学習動機に変容をもたらす要因となっていたことが明らかとなった。



### 研究発表 2

「セラピスト養成大学で英語プログラムを創る試みータスクとプロジェクトを学びの中心に据えて」

大池京子（北海道千歳リハビリテーション大学）

英語教育者として、日々の教育実践と研究活動は絶え間なく続くサイクルであり、教師はその途上で直面する様々な課題を解決しながら、プログラムの改善を図る。(クマラヴァディヴェル, 2001) 発表者は当初、3つの課題に直面した。すなわち、1) 英語学習に対して、モチベーションが低い学生が多く、また英語力も、幅があるとは言え平均的に低いこと。2) 英語必修科目が 2 講座しかないにも関わらず、プログラムに課された目標が高いこと。3) セラピストを目指す学生を養成する大学で英語教育を担当する教師自身が、「医療英語」

という教える内容についてほぼ知識と経験がないこと。そこで、教師は、「バックワードデザイン」でのシラバス作成、学習者の自律、主体的・共同的学习、「学び方を教える」といった概念（中嶋、2000）を応用し、様々な試みを思考錯誤しながら展開した。研究上の様々なテーマの中で、教師が常に最優先で心がけたことは、学生が将来セラピストとして現場に立っても、専門性を開発し続けられるように、「学生がモチベーション高く参加し、しっかりとした英語力をつけられる授業を創る」ことであった。この発表では、特に、2年次の必修科目「保健医学英語 I」のファイナルプロジェクトに焦点を当て、コースデザイン、発表の様子、英語力の伸長を、学生による授業評価と試験結果を基に、質的分析と量的分析を加えて考察する。

#### 基調講演

「教室内英語スピーキング評価の実現可能性：年間を通じた安定的な実施に向けて」

小泉利恵（順天堂大学）

授業において英語のスピーキング指導の成果を評価することは重要であるが、実施されていないことも多い。スピーキングテストの方法に不慣れだったり、評価するのに自信がなかったりなどの教員側の問題以外に、テスト作成や実施や採点に時間がかかる、採点が機械的にできないなど、テストの性質の問題がある。また、発音や語彙・文法、正確さや流暢さなど話すことの側面は多様で、さらに発表とやり取り、準備ありと即興、技能単独と技能統合などの要素も考慮すると、一つの形式だけで測れず、どの形式をどの時期に用いるか等の選択も入り、難しいと捉えることもあるだろう。本講演では、教室内のスピーキング評価を年間を通じて行うために、どのような体制や研修システム、資料などが必要かについてまとめたい。そのために、国内外で長期的に安定的にスピーキング評価を実施している例を紹介し、それを可能にしている仕組みについて考察する。

#### シンポジウム

“Theme: Integrating Theory and Practice in Testing and Assessment”

Coordinator: Kiwamu Kasahara (Hokkaido University of Education)

Discussant: Rie Koizumi

More and more attentions have been paid to testing and assessment theories. This symposium focuses on how these theories can be applied to practice, employing three practice cases. Active participation of the audience is more than welcome.

Panelists:

“A Testing and Assessment Course for Pre-service English Teachers”

Kiwamu Kasahara (Hokkaido University of Education)

There are many English teachers who are enthusiastic about improving their lessons. However, there are few teachers who are willing to improve their tests or

assessment. One of the greatest reasons for this is that there are no courses for testing and assessment in most teacher-training colleges (Kasahara & Sato, 2017). Several years ago, the presenter started a mandatory testing and assessment course, in which pre-service English teachers learn basic concepts of testing, how to measure four skills, and create a term-test in groups using an authorized JHS textbook. They are told that they should think about how to evaluate their students before considering how to conduct their lessons. Irresponsible testing items without any clear testing points can discourage learners (Wakabayashi & Negishi, 1993); good testing items that reflect the goal of lessons can encourage them to study more. Though there are no perfect tests or assessment in the world, the pre-service teachers learn how to make better tests and assessments to improve test-takers English proficiency.

“Evaluating classroom speaking activities with a performance test: Is it really valid and reliable?”

Rintaro Sato (Nara University of Education)

To make Japanese EFL students motivated to speak English, just giving opportunities for communication in English is not enough as they are, in general, “...reluctant to communicate in English, especially when the main focus of the lesson is on communication”(Tomita & Spada, 2013. p.593). Though my English class, entitled “Foreign Language Communication”, is based mainly on Task-based Language Teaching(TBLT), I often follow a step by step approach, in which students learn and practice before being engaged in real communication, by including reading aloud, communicative practice and Four Round Practice as well as the inclusion of Translanguaging practice. In my talk, I will introduce those activities that have made my student more motivated to speak English. In addition, performance tests seemed effective in increasing students’ motivation to speak in the class, showing a positive washback effect. However, I have been skeptical of the reliability and validity of performance tests. In fact, I...

In the presentation I will share my concerns with the audience and other presenters to have a fruitful discussion.

“Evaluating students’ writing: Why, what, and how?”

Aiko Sano (Sapporo International University)

Writing has been referred to as “the neglected child in the family of the four skills” (Freedman, Pringle and Yalden, 1996), and it still has not been given the due attention and affection in the L2 classrooms. Such reluctance in teaching writing is partially rooted in the challenges teachers face in evaluating students’ writing.

Shifting away from too heavy focus on accuracy of students' writings, use of rubrics in writing evaluation is becoming the norm of the L2 classrooms today. Although it has been widely accepted as a valid mean of summative assessment, using rubrics may not be the best approach as a formative assessment. It is simply not fine-tuned enough for the learners to feel the progress they are making. In this presentation, the speaker will share her ideas of formative assessment in her writing classes, with examples drawn from her Academic Writing classes in which students engaged themselves in making a newspaper on their own, writing various genre of articles.

## 〔2019 年度第 1 回支部研究会〕

日時：2019 年 11 月 23 日（土） 13：00～15：35

場所：北海道教育大学札幌駅前サテライトキャンパス

研究発表 1

“Develop L2 Learners' Metacognitive Strategies through an In-class Reflection Activity”

Ivy Lin (Hokkai-Gakuen University)

Yumi Nakamichi (Hokkaido University)

Metacognitive strategy (MS) refers to the ability to manage and control one's learning strategies, which consequently contributes to the cognitive development of L2 knowledge (Oxford, 2011). Current study investigated the effects of metacognitive strategy training for improving speaking strategy use in university-level language learners. 172 participants from English communication classes instructed by the presenters engaged in role-play tasks over six weeks. The learners were asked to write a reflection on the speaking tasks at the end of each class period. The results show increased frequency of MS use by the learners of high-level proficiency. On the contrary, the reflection from the learners with low-level proficiency and those without metacognitive strategy training demonstrated insufficient metacognitive strategies and high frequency of meta-affective strategies use. The presenters will report the statistical results, discuss the implications, and suggest pedagogical approaches to MS in language classrooms.



## 研究発表 2

### 「国内語学研修の意義」

上野之江（北海学園大学）

文科省は2013年10月より留学促進キャンペーン「トビタテ！留学 JAPAN」を開始しグローバル人材育成を目的に掲げ学生の海外留学を後押ししてきた。2019年には約39,000名の大学生が一月未満の協定校留学に飛び立ちその数は2018年と比較すると3,000名の増加となっている。英語非専攻である法学部学生も例外ではない。しかし動機付けの低さ、語学能力に自信がない、対価費用を考慮し、たとえ短期留学であってもなかなか留学に踏み切れない学生も多い。そのような学生のために留学へのStep 0（ゼロ）として2019年9月に2泊3日の日程でAll English Campを実施した。外国人密度の高いニセコ地区で9名の学生がネイティブスピーカー、日本人スタッフと寝食を共にして研修を行った。研修後のアンケートと学生のレポートから参加者の満足度が高く6段階評価で5.7であった。法学部の学生は英語を話すことに躊躇がなくなったと感じていることがわかった。本報告では、ニセコAll English Campの日程、概要を概観し、All Englishでの生活をいかに成功させたかを紹介したい。また、このような研修が有効かどうか参加者からのご意見も伺いたい。



## 海外研修プログラム交流会

### 「英語を使う」を目標とした北海学園大学経営学部の海外総合実習」

内藤永（北海学園大学）

北海学園大学経営学部の海外総合実習は、3週間のカナダ留学（ホームステイ）を含む、通年4単位の科目です。毎年応募者の中から、GPA、G-TELP、英語資格取得状況、面接結果を考慮の上、12名が選抜されます。「北海道企業をカナダ企業の社長に紹介する」という目標の下、前期週1回の授業で、業界・企業分析の手法を学び、2チームに分かれ2企業を訪問し、リサーチ結果を15分の英語プレゼンテーションとしてまとめます。夏休み中の9月に3週間、ブロック大学のESLコースで語学研修する間に、カナダ企業2社を訪問し、マネージャーレベルの人に対するプレゼンをして、ビジネスシーンでの英語使用を体験します。帰国後の後期は、留学体験をリーフレットにまとめ、後輩たちにこの海外総合実習の魅力を伝えるプレゼンを数回行います。本発表ではプログラム開発のESP的な背景、また、CEFRから見た学生の英語の実力の推移、留学後の足取りなどについて触れます。

#### 「北星短大英文学科の学生ニーズに沿った5本の海外留学プログラム」

竹村雅史・森越京子（北星学園大学短期大学部）

本学科では、定員(120名)の約半分の1年生が以下の5本の海外留学プログラムに毎年参加しています。「海外研修A」は、学生自身が、海外の研修先を探し、研修内容を企画・立案するユニークな単位認定型（自己申告）プログラムです。「海外研修B」は、長い歴史を有する本学科を代表するプログラムで、本学科教員引率のもと、約25日間ホームステイをしながら大学附属の語学学校などで研修を行います。「グローバル・インターンシップ」は、主にカナダやオーストラリア、道内外のグローバル企業等でインターンシップを行う2～4週間の単位認定型（自己申告）プログラムです。「海外事情」は、1年後期の4ヶ月間海外の提携大学で英語スキル向上を目指すプログラムです。「バレンシア国際カレッジプログラム」（通称：ディズニープログラム）は、アメリカ・フロリダ州のバレンシア・カレッジで7ヶ月間ビジネス等を学びながら、ディズニーワールドでキャストとしてインターンシップが経験できる道内初のプログラムです。本発表は、これらの概要をお伝えするものがあります。

#### 「小樽商科大学におけるグローバルブリッジプログラムとギャップイヤーについて」

中津川雅宣（小樽商科大学）

本発表では、小樽商科大学で実施しているグローバルブリッジプログラムとギャップイヤーについて紹介する。本学では、平成27年度から、地域に根ざしたグローバルリーダーを育成するための「グローバルマネジメント副専攻プログラム」（英語で専門科目を学修）を開始している。グローバルブリッジプログラムは、できるだけ早い段階で海外での英語研修と異文化体験を積むことにより、「グローバルマネジメント副専攻」への参加と長期の協定大学への交換留学を促すための橋渡しとなるものである。また、今年度から本格導入が始まったギャップイヤープログラムは、「グローバル人材」の育成を一層推進するため、入試合格者の入学を1年間猶予し、海外留学をするプログラムである。両プログラムの概要、経緯を説明するとともに、英語能力の測定結果、ならびに教育効果の可視化と事業効果の定量的評価を目的として試行実施している多面的アセスメントの結果等について報告する。



## 〔2019 年度第 2 回支部研究会〕

（北海道英語教育学会及び日本コミュニケーション学会北海道支部との共催）

日時：2020 年 2 月 29 日（土） 13：00～16：00

場所：天使大学

本研究会は新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して開催中止となりました。

〔支部会員数〕

2020 年 3 月 1 日現在

102 名